

はじめに

人は初めての土地を訪れると、見慣れないモノ、聞き慣れないモノに数多く遭遇する。そうしたモノに「エキゾチズム」を感じて面白がるか、「落ちつかなさ」が気になって不安を感じるかは人それぞれだし、そのモノの「奇妙さ」加減にもよるだろう。しかし、われわれが異文化を理解しようとするとき、最も有力な手がかりを与えてくれるのはこうして目に見える「モノ」どもであることもまた確かである。はじめは「奇妙」「不思議」に見えたモノでも、その社会を理解するにつれてそれぞれのありようにちゃんと理由があるのだということがわかってくる。私は地域研究という学問の醍醐味はこの「不思議の理由」発見のプロセスにあるのではないかと思う。

アラビア半島の南端にあるイエメンという国は、日本との「異文化度」がかなり大きいので、目にするモノはそのひとつひとつが物珍しい。男たちが頭に巻いているターバン、へその前にぶら下げている短剣、女性のベール、レストランで出されておっかなびっくり食べる食べ物や飲み物。人々が午後のくつろぎのときに噛む葉っぱや、消防車のホースのように長い水タバコの吸い口だって奇妙である。そうした不思議なモノどもが、どんな素材でできていて、どんな形状をしており、どんな使われ方しているのかに注目すれば、そこには自ずとこの国の文化や社会、宗教や倫理観が反映されていることがわかる。伝統的なモノばかりが「不思議」の対象ではない。日本から輸入されている工業製品であっても、イエメンにおける使われ方や彼らの生活のなかにおける意味は、われわれにとつてのそれとは異なる場合がしばしばある。

二度にわたってイエメンに住み、都合五年間をそこで暮らすなかで、私はさまざまなモノに不思議を感じてきた。だが、本当におもしろいのは「奇妙なモノ」それ自体ではなく、その「背景にあるもの」である。モノを通してイエメンの文化と社会を描き出す試み、お楽しみいただければ幸いである。